

三省錄

後編

五

9
3780
10止



昭和八年
九月廿四日
長男五郎
代書

原義輯



軒の志はふ

○亂世久しく續きやうやく治りたるを久く世界一統り

財用不足して貧乏はなりてハ飢餓に至るもの多し
太平久き代と世界一統り財用も満足して富饒は
餘りて奢侈長過一夫は飢餓にける者多し此を亂
世の民を貧乏なりて苦み太平の民を富に飢餓に苦む
貧乏なりける民ハ救ひ恵みやま富より貧乏なりける
民をすくひめぐみぐるたゞ蔬食之く食つけたる
人ハ腹のふりたるを湯漬食は塩菜も佳有珍美はお
なりくうなるまじも美食澤山は食つけたる人ハ腹のふ

附下

あつても一汁二菜此料理よくあはれを食するやうにも
思ふれそ人情に常なりゆゑ古語にも凍るるを衣
をとりやまゝ飢ゑるものゝ食をとりやまゝするといふに
乱れは貧窮を救ふ道よく治せは富饒ハすといふに
乱れは民を食は飢て疲勞は動き得ぬ病人なり治せは
民を大食してふと里をよき居れなりぬ病人なり病て
得ぬぬ處ハ同症といふれぬ病因ハ雲泥の差なり
嬰鳴館
遺草

○神祖ある時女の顔あらはうく往來するを茶屋女遊び者
の類なりうづき覆面く顔く一人取うき休て通
るそ女らくく尤よ見ゆきう武士の女房ハ上臈めさる

るより顔はき少くあらくきつて相應するもれなり
古代武道専らより代を女は客色第一よき眉毛と剃落
白あらくく見ゆる容体女も武をさるよりゆえなり
依之戦國の時の女を今時の男子の働きより勝るる中
おろしと意ありより酒ハ陽春と雲よきるをこれ
なまを遊山翫水よ多くを飲めつらむなりぬ喧嘩仕出
そのなり鷹野軍陣をこれ刻ハ下戸も酒飲ハハき強なり
て一働き精するをこれなり小空より水く酒吞を祝言の座
舗めさるより上戸の茶挽酒引請てまゝくと呑過るるを氣
味よきそのなりと所意ありより
駿府翁物語

○近江國坂田郡鳥居本宿にある旅亭此家は傳り来るのみなり

天正十三年閏七月十二日秀吉園白成此所系内所祝此秋
立者方之通り

親王

若宮

龍山

九条殿

一条殿

二条殿

王

伏見殿

宮四人

花山院

久我殿

西園寺

菊亭殿

徳大寺

初献

のころ栗そき物

所かきつけ

二献

くむちん

所すい物たい

三献

さしこり

所すい物ふさ

四献

さしこり

けり物

所雑煮

五献

むむき

所そ(物)きり

六献

きび

き

うけり

七献

たふ

からす

くり

所本膳

志不引

あふせ

めー金銀漆あり

二

金のきり

すけ

あつめけ

ふのけ

三

やまの

金のきり

白鳥汁

所菓子

九色

うすかハ

あらそき

揚皮

アんぶ

豆あり

あぶ

打栗

こき

此に

以上作

花いろくあり

柳庵雑筆

○

明暦万治寛文の半までを牧野佐渡守親成京都の諸司代

より老衰の願といひ京都華靡此沙汰を七聞一々老臣

此内より板倉内膳正重矩を佐渡守代に任付らる此時始

て兩町なり不と七並に宮崎若狹る兩宮對馬守をつら
らる内膳正上洛して公家門跡の遊興あるをあらはに先
町の奴系が著とらりめける座頭の官位千金とよ出さ
即日檢校とさる是を一夜檢校といふ物座頭の官鈔配當
は甚不務あるよりつゝある所人檢校仲間となりて配當
を不分するを内膳正聞て其者の眼をくりぬく旨目とな
るとても座頭仲間あるべし醫者の列は八叶ふりとい
つゝらきて大きは思は檢校辭退しるゆゑ志むらく宇
舎よりゆるけられし那波屋十左衛門の妻の娘とよ付れ
真似して聖護院の宮峰入れ供をさしおれをつくりし
むきとけらるるとつゝあるよりつゝ宇治橋のそとを

を科代よりけ直せらるるは一月金銀の利是らども
へ用をくして作ておのが姓名を擧げ擬寶珠よりけりし名
聞とよらさびる此の内膳正聞て一生後悔ありし
改正
武野

燭談

○古老物語享保年云七十年前以前昔々太神宮所拔大神樂と
て毎日江戸中を徘徊ありてその有様親式正しくして
先へ鼻高の面をうぐりしるも此直垂は白袴を着て弊を
持て立次は十四五才よりなる男女美しき装束に瑤
珞とうぶ長緒を着白袴を着てより中略と鈴おし
ち三番は麻上下着する男箱と持四番は布衣の装束と
る男其次は四ツ足付する大長持と蓋とありのけりて

其上は獅子頭を直一中は太太鼓小太鼓と一万度の市
振と真中は立巾幣を多くこれ長持四人の六人よりうは
いもれども烏帽子白丁を着白きくち袴を着すけや
うの左右は付笛太鼓小鼓を拍子よくうちあそむこれ瑤
路といふは舞子神樂を舞其むやうにきんぐと
て威はるゆゑをとり其内の舞は烏帽子を左へ右や
筋連よりうづなぐりて道戯にて見物れ舞は入りりい
やれ大神樂といふを至て賤き風俗より將來なきを
おもひもよりむ太白衣は太廣袖これ木綿布子幅廣の
帯を走りかけし太腹巾着とさう大小鼓を打笛をい
ちうけども情もなき小唄はあそびをてやうと多くて目くら

男女の氣をさるる振ふる狂言をいへる兎角下女
下男は面白からするものゝ仕組身をその人の見るべ
きもれはあらむ太大神樂のちんあるべきよめなり

云大神樂の風俗享保年已よりこれおとくなれどそ
の権振を格別名にふるきあらむといふも近あるこれ
筆代仕業を恰も放下師豆藏の戯は似たり何よりこれ
古礼を失ふる歎すべし

○やう云むうを正月男子は破魔弓の的を射て遊ぶ女子は
そ弓の統る古のよりなり女子をすわむつぎ羽子をつぎて
遊ぶ三月を男子は雞合とて雞をけあそむて遊ぶ女子は
雛人形をうけあそむこれ昔物諸道々をとりて雛は食ふや

そなるより子餅とむその日ひはあま酒を錫の酒
利といひて親類中へ送るは成人の時嫁入て世帯
持の稽古あり五月の節句ハ幟甲を立粽をあらうとい
ふ親類へ送る翌日六日ハ男子七歳をうりより十
一二で此子作集里其中ハ大將なる子ハあがり甲を
うがり豊浦太刀をけり豊浦より錦を裁くわらの貝を
ふきて備へ立となり印地打といふたとして遊ぶはを
軍陣の稽古なり九月ハ生妻を煮て取替はす子
供の狛犬の子を持遊ぶといふ成人て馬を取扱ふ稽古
女子は百人一首をおねはせ歌うて銭とらせ見出
るひは遊びをけするはと目しこれ働くるあたらやむ

うりを何れとよ小身より正月五節句ハ主人麻上下
を着客はあひ仕の侍七麻上下を着す毎月朔日十五
日二十八日ハ袴を着けする正月五節句を其家のうちう
髪をけけ仕女の志んりも髪をけけすべく十才以上の
子供を親の通より衣服をあらうむす神社寺院へ糸指
するは家の主人を上下を着て内室ハ髪をけける近年ハ
主人より一人より袴をけり着て糸指を内室ハ幅廣
の帯むすハ大形うちうき袴とてき袴とてうきをけ
いづる

最云近世ハ子供あそび大凡似寄れども三月雛の泣
利ハ醴酒を用る者なり皆白濁とあるあり予ハ兒童の

はきハ會合のふふ一七遊興利勘すハ食物れを其
中分別らしき顔色の人ハ立身のうせようて手れ筋上望
れふふ一すハ碁將碁茶の湯をいふハ此咄一ののみよ
て武道の噂をうろくすハきどもあまらハおとす一き
客の咄一よて下品なるハ二味線浄瑠璃歌舞妓役者れ
けをーるいよて終るもあり

義云刀服居の物好古風れ存る處よてはきバ一を伏見
よて太閤殿下刀れちーらへを見て是ハ誰き是を彼と
て其人を圍射ち一よ一ツとて差をけり一事あり
七里ひあふき里今ハ外見のよて中身ハ心を用る者
寡す一歎息す一無用れ贅物ハ似あり

○す云む一を土藏を持する人千石以上ハ穉なりはに
中小日向邊へけりて土藏十と見えす町家を有はる
所人質屋酒屋をハ持たり武家よてハ五百石や七百石ぐ
ら外の人ハ茲持ぬの多一

○又云む一を仕置する侍上下をを袴をけり着てあま
よも大方股立を取て歩行馬上人ハ股立を取て馬に乗
をりす柿色の三尺手拭よてをち巻きて往來する人
多一下ハ侍仕とてあま獨りある時ハ必ず股立を取
てあまき中間ハむけり使はゆくハも尻高くとす一すり
て歩行一近年ハとあるハ股立とらず尻もさふら
はす一とちやふや一人を見ん

○すゝ云むうゝを侍徒士中間と其主人とて成敗するも
度くなり凡其科人を

一侍其外少く盗みをもとの

一主人は隠して供歸その馬は棄るも

一欠落のもの

一世より一もそれ

一意外にそのもの付中留も主人の手討多し

すゝ云むうゝ首を切るもあり

右を誰はさむるとなく江戸中一同の風氣なり此成敗も
のとけ料の刀脇刃れありものをも然るは隠しよ
よゝの事世上よきくあくなりハ武氣の義なり七八

十年以前此むうゝ男女の事公人請状の文言のうらよ
いとハ少く替りたるを

一此そのも取適欠最仕に其もれ品々尋出相渡

中居くは右尋出に不中の内事欠く人取用い

私将才人代り召寄らせ何分も召仕可仕来い

すゝ女の事公人ハ私妹妻りよせらせ何分も人

代り召仕ひて成い相中召寄公不届有之に

其隠何分も私へ伺聞らる居くはそ不届なる事

中上り召寄人同前私を召仕可仕伺付い少

も此恨は存せり

右の文云ある處のあらうり請状は此文言を

なりしなり尤も當分は人代と出りて其上尋出り
事なり

○又云昔ハ番町も其外も大名外を瓦ぶきれ家作なり
又近年ハ皆瓦ぶきとなりて火の用心より

○又云むろを江戸中ハ蠟売ぶき四五軒なりて其火の用心
より近年ハ大方かきむろぶきとなりて火の用心
より
以上九條
古老物語

義云此書を新見傳左衛門正朝入道行年八十一歳にて享
保十七子年末の秋書集めらるゝよりして自序は享保
十八丑年正月下旬にわたりて春雨ふりてはき徒然
なるも八十餘の老人連打寄てのはふりと聞ばゆ

そ百年以来當世まで世中ハ風氣うつを替りたるも
しよて云々あるをむろとあるを皆寛永正保より享
保に見合ふものと見ゆれども古昔の質直忍ぶるあ
まりあるなり今ハより享保より百年有餘に末な
れど今風俗のうつりたるはまさもあるべき事なりは
どそ否泰ハ時運の必有の習ひなりと今時のなりも古
昔に移さばうつりけりや

○神祖ある時師老ハ男の心を持ちたるより歴々此者ハ女童
子ハ氣を奪つて業平侍となると思ふなり左様の風
はれあるその我々く嫌ふなりむろより其れ説は武
士の武士くはきと味噌のみそとさきとハい々ぬその

もと下劣れ誇りしつゝなまじきことを恥より見えてお事よ
てやあらん定て公家や町人の評判なるべし武士ハなる
べし武士はく味増ハなるほど味増はくあまじきこと
ぞおそれ武士を何きうてしよらんや公家くはく出
家くきく町人くはくても職人くきくても忍びくうらん
たゞ百姓くはきうこよりとぞ思ふ味増もなまじきく
もあまじきくてもちくきくてもを何きくても何
よらんる味増れ生得の味増はきき然るべし右の
武士は武士はくはくてもよらんといふ説ハ武士きくは
はくふといひ出くする言葉なるべし左様の者ハふん
どーを除てきやくふをきせてくれぬ是平生きく上の

事をれどもおんじんの大切れ時ハ夫きのおろよてハ
き事ハなつてならぬものなり其時ハ身はくろひする
必定なること常々嫌ふなりよ一通り此風を常々
とともあまじき自然の時ハくはくものあり夫ハ平生武士道不
心掛の言はけ誂をくはくといふて極意武士道嫌ハの不心
掛その言葉なり常々心よけきくして俄なるふとは
てを更なる我幼少より諸國侍の義不義と別腹を能
く吟味してきくき好きなる言葉く聞及なり天地をつく
してハ武士のあらん限ハ此道理するまじき常の心掛
といふ事ハく近くて軽き澄極ハ灸ハ飛火の十傑陪をきく
覚悟するを女童ハ見事とすゆるなり飛火覚悟なき不意

才を以て鬚男も多かる事なり其澄樞なり武士たるものハ
一本鎧の小身者なりとて武士れ心をくく持て十二三ハ
七ならざるや右の心をつけて能くいひきくのを夫と移ら
ざる出家の町人となりて猶も左なくを右振れその武門
は有之ハ日本の怨なり

○すの所意は我若年れ時駿州に在るときそのよむ坊主の三
拾といふものふを聞くを聞はるる二要三切といふ事あ
る先二要ハ衣食住三切ハ軍実旅なり衣食住の二要を人
れ常の要なり此用意の心掛専一なりして軍道具客道具
旅道具是なり武士肝要なりその志高くを分限お応より
て後は外の事とすをばとといひる是ハ聞する事なり

一言よても用は立事なりと我初き心も心は銘どて聞覚
えつり系たるは今注を加へたり二要三切三行といふ二
行は道藝餘なり武士たる者ハ道は疎くしてならぬ道
系を才一心掛づ道は心掛賢人の位もくも武藝をあらひ
る軍役は不立不勘定よりてなり果て是たらず
郎忠勝 同上二条
本多平八

○神君様駿府は被る入山頂折々岡東へ所舊野は社為入千葉迄
此逗留掛へ入るをいひる事あり其當七人衆と号して古
き師召仕の女中ありなり夫をいひるを召連といひる
一寸承るは一老師召仕の女中七人召連らるハ大造の格な
きども其頃の事と承るを七人とも皆懸掛馬より師召

の外は女中を一人もなかりなく高貴の女中内侍
たりしより一人は召仕の下女召連はるを實は所質素と
中づいてはる石取の陪居の家内より七ヶ極より輕くハ
系らるる食之より其苦の事なり且其千葉より所用に
有るよりさうする所夜具を大切は納めあるより皆苗木綿
なりとぞ

○すゝぬるは奥の伊達より年々苗木綿百反づ就上あり
を本多佐内より苗木綿國持衆より就上なれを 上極
よきぬきものと里召女中衆は仕若よりなれはる女中
とも迷惑なりゆえ以来見合はるべしと申はる由
是より當時奥向の質素人数の少き所美風推さるべし

此は美風の近代は繁昌の根本なりとるべし此通をらる
とて此は美風近き様は度々ゆえ近代の永久に有べし
○近年より追て物事過重に相成り段多なるといふ事を余
が若年の頃より大名屋敷より在る番所勤番出の處に番
所勤方並帳と言物有其帳享保以前は一年は美紙二十枚
位は過る寶暦の頃より及び享保二寸計は成寛政の末より
より三寸計の帳二冊は至り余ら出ハ文化の末文政の
より四頃あり其時ハ既は三冊より及びより何の異なりと
も有ると思はば左様にてハなり とも枯枝の出来とある
土が落しのとや立はるより夫れ先何書の見合を書れと
二通も三通も入ゆえ如此に數多ハ成なり自然と少人

数^{かず}くハ勤^{つとめ}にうめる果^はハ師^しの字^いホ近^き書^き方^かきよりハる先^{せん}
例^{れい}帳^{ちやう}をくても才^{さい}士^しくても勤^{つとめ}らす帳^{ちやう}面^{めん}ハへあまを不^ふすよ
ても勤^{つとめ}るゆえ帳^{ちやう}面^{めん}計^{けい}操^{そう}覚^{さく}ゆるを功^{こう}者^{しや}そのとやよハ成^{なり}行^{ぎやう}
ハる人^{ひと}才^{さい}を屈^{くつ}する苦^{くる}なり

○衣服^{いふく}の制^{せい}度^どを立^たべー上下^{じやうげ}衣服^{いふく}の制^{せい}をきき金^{かね}はへあれば如^{ごと}
何^{なに}根^ねの美^み服^{ふく}もあらう次^{つぎ}才^{さい}はなる所^{ところ}人^{ひと}下^げ賤^{せん}の者^{もの}金^{かね}は任^{まか}せ
て美^み服^{ふく}を用^{もち}い夫^そは付^つてを士^しも銘^{めい}にん苦^{くる}後^ごてハ威^い光^{くわう}を落^{おち}
る根^ねより変^{かは}り近^き奢^{おご}の風^{ふう}も長^{なが}するをれば大^{だい}名^なを大^{だい}名^な
舞^{まい}本^{ほん}ハ舞^{まい}本^{ほん}平^{へい}士^しを平^{へい}士^し百^{ひゃく}姓^{しやう}を百^{ひゃく}姓^{しやう}町^{ちやう}人^{にん}を町^{ちやう}人^{にん}の衣^い服^{ふく}を
定^{さだ}めをのバ上^{じやう}下^げの分^{ぶん}も明^{あき}らけよ自^し然^{ぜん}と法^{はう}外^{がい}奢^{おご}ハ止^やむべ
ー費用^{ひようぎん}をくづれば方^{かた}程^{ほど}多^{おほ}くれども都^{みやこ}て法^{はう}ハ活^いをあらと

ひ宜^{よろ}しきと裁^{きり}て用^{もち}は適^{てき}するを其^{その}人^{ひと}は存^{ぞん}するをれを是^{こゝ}
と略^{りやく}す以上四糸或人時
更と論ずる書

義^ぎ云^い前^{ぜん}編^{へん}の序^{しよ}言^{ごん}ふもいふ衣^い食^{しき}住^{ぢう}の三^{さん}ハ皆^{みな}礼^{れい}の存^{ぞん}るを
りて偷^と等^{とう}の罪^{つみ}を犯^かす変^{かは}りて儉^{けん}無^むれは抱^{かか}らるる里^{さと}
ふは予^よの旧^{きう}宅^{たく}近^きき遠^{とほ}き一^{いっ}群^{ぐん}乞^ぎ子^しの村^{むら}あり一^{いっ}の其^{その}等^{とう}
の婦^ふ女^{にょ}子^し常^{じやう}は絹^{きう}紬^{ぢう}の常^{じやう}服^{ふく}をあるあり却^{さか}て傍^{はう}の農^{のう}民^{みん}
れ女^{おんな}童^{どう}ホをけははれ布^ぬ子^こを着^きるありけは道^{みち}路^ろの人^{ひと}
を化^け村^{むら}の女^{おんな}子^しホは慇^{いん}懃^{しん}と盡^{つく}して道^{みち}を同^{どう}ふは及^{およ}ぶも
多^{おほ}のり一^{いっ}是^{こゝ}乞^ぎ子^しの婦^ふ女^{にょ}子^しハ都^{みやこ}てうらん木^き綿^{めん}の半^{はん}襟^{きん}
との又^{また}を常^{じやう}人^{にん}ハ常^{じやう}用^{よう}は異^いなる色^{いろ}木^き綿^{めん}をけさるるよ
ろは一^{いっ}際^{さい}目^めり觸^ふきき是^{こゝ}は是^{こゝ}の人の人^{ひと}といふるをあら

○僧澤庵そうくわんの兄あにを秋庭半六あきにわはんろくとて小出大和守こでやまとのくみ吉英よしひさの家来食禄ちからいしよく

二百石なり其身花器を好むなり争摺切なり故に澤庵よ

陳言の状あり

兄^{にい}は又^{また}何事^{なにこと}も天道^{てんどう}次^{つぎ}才^{さい}との正^{ただ}文^{ぶん}解^{かい}尤^{なほ}其^{その}分^{ぶん}なる正^{ただ}事^{こと}は
 以^{もつ}得^えず夫^そを常^{じょう}此人^{このひと}の知^しる事^{こと}にてハナク古今^{ここん}松^{しょう}の葉^え
 を細^{こま}く蓮^{れん}の葉^えを丸^{まる}くハ如此^{かく}我^{われ}身^みは應^{おう}ずる様^{よう}は天道^{てんどう}と
 能^{よく}弁^{わきま}へ小^こ才^{さい}の者^{もの}ハサ一^{ひと}引^ひ下^{くだ}おて華^{くわ}麈^{じゆ}とちず大名^{だいめい}を其^{その}
 程^{ほど}と才^{さい}を持^もつ則^{すなはち}天道^{てんどう}とてハ經^{きやう}一^{ひと}國^{こく}の米^{こめ}を天道^{てんどう}次^{つぎ}
 才^{さい}とて片^{ひと}端^{たん}より喰^くふをハ一^{ひと}歩^ふ跡^{あと}の積^{つみ}や百^{ひやく}歳^{さい}ハ其^{その}時^{とき}天^{てん}
 道^{どう}は借^か銀^{ぎん}借^か米^{まい}とそ有^ある處^{ところ}ハケ様^{よう}なる謂^いを不知^{しらず}して天^{てん}

道次第と云て寐ても起ても天道より食服をあてゝゐるやうな世をふりて来歴なり如何なる細工人に宣親なる世を不知と但し我心の様ある人を宣親より三
五の十八より一吾と固め才を持分別能摺切ぬ人を宣親とせしむ抄子と宣親より直よりハ如何なる石取に
身より二百石取の祢ハ天道より背き中より貴屬を所振舞
廣く見え中より夫を天道より背き月より讀み十五夜を
圓滿に成し一バ又一ふつてかけしは是人間の足せりめしては
此へよりみづきやかく月のいけよみの宮や人の世
此より至極の理より長文祢ハテ後所有者より得せ兄弟と
世をきては為能し一なりと如斯は何を振廻をりて借銀

無之様は可成に親類遠はうり親き知音る恨を結ふふ大方欲ぬは

月日

澤庵

秋庭半糸書

義云流石澤庵老師の教諭至まり盡まり是神儒佛
三道は渉る公然此理言なり儒は天道奮盈の聖
語あり佛はそふ欲の戒あり神は所直の教あり古
今の人誰七此理はあるといふも躬の行する者寡
なりきる自分も其の罪をそふを苦む能く日三
省し四省して慎むべきと思ふの百尔の事人
を盡して後天なるべきより自ら愈て自ら勤む

て天は托す固より過言なり

○或書は云吳州は米江戸廻るあを寛永九年より始るな

其頃仙臺の米直段を兩は七石四斗なり中頃一分ふ
斗なりとぞ又兩國橋ハ萬治三年出来て昔ハ將軍ハ
所意は不叶者あれを大小は不限江戸屋敷並上本所の
荒地を被下りとあり

○或書は云真田古伊豆守信之常々紙子を着用あり如何
に家中せは紙子を着用無用と急度や渡制禁なり然る
に兎玉三助と云輕侍あり紙子を細工し正月元日
は着し登城列座せし三助神の士を通掛其の目見たり
が太勢れ内はありとを見咎りて何とて着しるや

と立どよりあらうは中なり暫あつて汝を常々輕口者の
 由聞及早に何あても可なりとあり三助取あへむ
 古一の鑑はまはるる子ふ風の方矢をそならふりけり
 伊豆守の奥せられしとぞ

○享保年間ハ今を距る事僅は百三十年程なり其頃を諸式の
 求め安く又諸職人此雇ひ安きと今の子は校ぶは三ツ
 の一ツは當たり其證をとりたるを予或日小石川傳通院
 地内なる澤藏司稻荷の開帳古記録を見しとあり此開
 帳ハ享保十九甲寅年此四月朔日より初りて因に六月十
 一日までありなり尤其頃の鈔の價々々々相違して
 金一両月付五匁二匁文なり是右記録中に見ゆ其記は

曰く

一 札板廿三枚 札板ハト板 縦四ト板 巾一尺二寸 拾七匁五ト

一 同札板板六本 九尺五寸角 板中三寸 三匁三ト

メ板ハトニ

一 灯籠五柱 板根板 釘次等 共 七匁七ト五匁

一 くりんハツ 札板 釘次等 共 八匁四ト

一 大工四人 札板 釘次等 共 七匁五ト

メ板七匁三ト五匁

一 臺所継足用 板丸を板丸を 九尺大三寸 費釘 板根をさしほり代り

メ五拾匁ニ

一 惣小屋梓殿さうりけ同設釘代共

メ式百九拾四匁ト五厘ニ

一 大工手^{どくし} 三拾九人^{さんじゅうくにん} 金^{かね}ハト死

メ七拾三匁ト二

一 簀^し廿枚

メ九匁ニ

一 五人^{ごにん} 金^{かね}根^ねニ^に 竹^{たけ}釘^{くわ}共^{ども}

メ拾貳匁ト

一 小屋新^{こやあら}屋^や根^ね板^{いた}ニ^に 金^{かね}共^{ども} 金^{かね}根^ねニ^に 金^{かね}六^むト死

メ九拾三匁ト五厘ニ

此^こ分^{ぶん}越^こメ銀^{ぎん}五百六拾八匁五厘

金^{かね}一^{いち}て九兩^{くわう}金^{かね}拾^し二匁^ぶ式^{しき}ト五厘ニ

ヤ^やこ^ころ^ろ 買^か物^{ぶつ}の^の記^き中^{ちゆう}ニ^に云

酒^{さけ}三^{さん}樽^{ぼん} 金^{かね}兩^{りゆう}貳^じ分^{ぶん}六^{ろく}匁^ぼ 金^{かね}拾^し貳^じ匁^ぼ死

とあり右の記録見るべし今ハ酒を樽の代なりすこ大工
屋根職より諸式の價莫太のふと見るべし又集鈔を金ニ
直^{ちか}し^しる^る条^{じょう}下^かニ^に兩^{りゆう}ハ^ハ五^ご貫^{くわん}二^に百^{ひやく}文^{ぶん}之^之と相場^{さうばう}を^を記^きし^しる^る銀^{ぎん}
を^を圓^{えん}東^{とう}一^{いち}つ^つ七^{しち}六^{ろく}拾^し匁^ぼニ^に定^{さだ}め^められ^れし^し鈔^{しやう}價^げハ^ハ時^{とき}ニ^に高^{たか}下^{した}あり
ま^まの^の金^{かね}ども^{ども}も^もこ^この^のお^お違^{ちが}ハ^ハナ^ナ今^{いま}は^はら^らく^く考^{かん}る^る大^{だい}工^{こう}手^て留^{りゆう}
代^{だい}金^{かね}人^{にん}に^に付^つき^き金^{かね}ハ^ハト^ト平^{へい}人^{にん}日^{にち}雇^こま^まる^るの^の價^げハ^ハ少^{すこ}し^し増^{ぞう}ふ
の^の今^{いま}を^を大^{だい}工^{こう}手^て留^{りゆう}平^{へい}日^{にち}も^もて^て四^し匁^ぼ五^ごト^ト六^{ろく}五^ご匁^ぼを^をら^らで^でハ
雇^こふ^ふと^とな^なり^りべ^べし^し其^{その}内^{うち}屋^や根^ね屋^や職^{しやく}を^をハ^ハ五^ご匁^ぼより^{より}以^も下^か
の^の者^{もの}ナ^ナし^しと^とそ^そ況^{いは}や^や新^{あらた}焼^や木^きの^の場^ばニ^に至^{いた}り^りて^てそ^その^の相^{あい}對^{たい}と

をいふもの金武米あるひはきふとせり揚て雇ひを来る大
工も人々を尤官よりハ其時は厳しく難有命令も下る
といふも時勢のなりハ人氣を振ふのも驕りて其心を改
め後ハ其罪を犯して縲紲の恥を蒙るに至り返りて
古代の質直見習いものなり生を送るは心安き事ぞこ
そ仁義の行も出る者なり孟子も昏暮人の門戸を叩
て水火を乞ふより一けふ者なり至て是を乞ふともあ
る異にも無量の欲を除きて平生儉を守りて物も足
なりさる其足を獲てより朋友財を遁れあるを獲て能散
する礼記に教ふも基きるハ世は難有き人とや謂はんハ
いと易いふ一とくも驕奢ハ慎べ恐べ驕ハる物と

あらずあらめ物とらざせぞこそ不義不法も知しけり
多欲は陷り其咎を受るそのあれすと思ふは驕の源ハ多
く妻の愛より起り来り妻子ハ多智ふて唯衣
服より飲食に至るまで免角人ハ誇りてゐる者なりそれ
が移りて主人は乞ふ主人も其志は溺れて其意を遂さ
せたり自其習ひは沈めり心あふ者ハ萬事婦女子の志を
あてりけしを捕成其子を戒め一言は汝万事母と
終るなりといふは母ハあき者よとあらゆ
七男子ハ都て果敢して事を行ふべきなり

○酒井 讃岐守忠勝君常は小坊主の側は紙よりを紙紙
付扇子箱に入て毎度の巾着箱の封は開らるる時

永田六之助例の如く扇子箱より紙よりを取出し紙より
れ真中より封をばけ跡先を切ては状箱を持立んり
る時汝ハ身上を持崩すべきなり輕き紙よりなれども片
端より封を付ては兩度の用を盡さるる真中より封を付
るゆゑ一度は用のくなり身上より崩れず永く公勤る
様は覺悟をばと宣ふなり

○同君此亭へ由之家づゝいりてまひても公儀の所威光を
重どらば一為は對面の時さのこは襦袢の袖もなり所同
輩より少く慇懃する位の事なり或時尾張重相々へりて
る茶屋長意も糸合七寛こと由閑話有るは重相々長意
と口して横柄ハさむは嫌ひて當家は多葉松盆を
ふとを志すゆゑ棄物此内なるたむ盆を持系をばと仰

有て長意やうて件のもむ盆を重相々の前へ持系
生を渡され嫌ひなり移る置べと宣ふは縁側の障子
の陰は並々り由對終の間を重相々三度由立有てるこ
を聞し口々るは此方へ取寄せぬとは挨拶なりりる
ゆゑ由喜礼の振し見へるは是れはあらは平生由三家
方より所儀あるより由音物有度毎は由着服を改免ひ
由自分由頂戴有て後由直ありとなり

○同君土井大炊頭利勝と由同道りて由退出れと或は臺所向
れ尺と覺しは男羽織の下は盗物と見え一品を隠し
るは所儀不へ下座するこそ羽織の下は物見えは利勝

小聲よりりく忠勝君の袖をひらしてあせりたへと室ひ
々れを忠勝君うちきくひて物事隠さる様あり
きと室ひけき利勝いふもくといふると其時の仕
ち翁此物語なり 以上三条 玉露業

○白河君候よりり質素節儉を用ひたすひ下りて厳く
儉約れとを令りたすひ公朝りて儉約の事仰せ出さ
せりら下られは効ひんく此時節柄と号し素駒を退々
儉約を守るふと寔は大事ならずや儉約の事経傳の中句
く事くは明のなりといふもあらざるそのハ儉約と各情
と混り心得違つる多し儉約の二字を事此費と省き
ちぐりて取忘りあるふとなり各情の二字ハ略ひ

すりは物と忘りてやむと云登へハ換と云費
といふがごとく為りてよきとハ費なりとて為ざる
そナニ儉約なり為りてこのをハげるとを換なりとて
為ざるそナニ各情なり免角は儉約と云ハ費と云ふこれ
謂なり儉と吝とれ別ハニ多きことなり
東照大神君の此事よりてあるべし或日板坂朴富とやうん
此醫師のあまなるこの側は侍りたりは人參を下り
るべしとの

上意より雨の雨多し水欄に遊さ下り来る時は此連
柄はありとあらぬの書紙と一枚とて来り伴の人
參を項載せんとしるは

上意よりこれハ我國ニ於テ諸侯へ状進す時は用る紙にて大
切れそのなりはやうのものを包に用るそのことをさぞ
人參ハ大切なるものをれども何れと澤山よとらとたり
とて七人の病を治するものをなり書ハ一技といへども包
ニ紙に用るときは後皺となりて用ひら進す大なる
費なりとてこれ朴富の羽織を脱ぎ一めき進すは情の
上意よりこれ人參を下しきとてや世人多く義理と聞
きあるひ人參を贈るより少くあるを候とせよ一
是れ所謂各なり候よりあらず人參そのをありある
とを前の人物れより一きはよりひて贈るべし強てす
くなきを以候とせよひより一とせよらば孔子公西華

栗皮をあへる原憲は栗九百をあへるたよりを以てさるべ
し世人より諸事の物入にすくなきをとりて候とせよ
は進す大なるなりなりえ進ひより予三四年已前より土を
つと焼製する火鉢を買ひより一がたれを箱を指すの
火鉢をいせおきる進を今より毀さずして用ゆそのあらは
隣家なるものも予と共にこの火鉢を買ひより一がたれ
ありれよりして用られバ二三ヶ月を経て所よりけ其上
そのよりれて毀さるそのよりは二三四買ひが前の
より久しうらずして碎てけり予より一が箱をよりら
る物入をすよりく多たれどもそのたもつと久し
くかの三ツ四ツの候より比より進をいよりなり其上今

は存すあれ食をらんその家と修復するもす、同ども
の入り口のいといて上をまかりを直せば換する事も早
かれへへはて大ひたる損金なり其本をいよく修復する
ときハ初獲の物入里ハ多かれども年を歴て金くあれの
つづき益なりあれより食なり候約と各情ハ是は似て非
なるものなり近きある遠里子う是は似て非なるもの
弁は勇なきしれハ仁心ある人よりなきらりく意地を立
る老ハ義を立る人より似たり子細者ハ礼ある人よりきら
るく奸するしれを智ある人より似たり事を許すものハ正
直そのとまき血氣はばやる者ハ勇ある人よりきれ無
骨者ハ潔白者よりまきらりく換著者ハ活機ある人より似

より前後れ志すりしおとくすあるものハ意欲此人より
うごかれ軽蔑のそれハ慙懃なる人よりまきらりく愚
鈍なるものを町噂する人より似たり臆病そのハ才を全ふ
ある人より似たり端ハ愛興より似たり偽と謀とまきらり
く各情ハ候約よりまきき換平そのハ端ハざるもれよれり
とこの言をありごありるあれをいよ記を
理齋燕 雀論

○井伊兵部大輔殿内父掃部頭面と由一所又大坂内陣より立そ
れあらを由年十七八のとき内宗督内相續掃部頭より由
里を所せいの掃部頭面あるとき由病氣にて目あら由
出入れ由氣よ入の醫者よりびをされ醫者由居間より通
見えれより下ハ竹まきより壁のありけりけりより夜

著ふらんも無相なりとの醫者無はあらず脈はやうは
うんとうよりはくまなりあがらまはてはあらずよくい
はんとやあげはてとの医者はのく血氣より前より
もまゝあるとを中まものうて前よりははのく血氣も
ち血不寧生と相見えやと中たれを掃部頭屬をさるた
やうよりまどとをいはればその血とをさるた血居る
下を竹をのきと見えや血寒濕より一なる血あつた血
るべくい血念の入る血のくを極し二重はあそむはまそ
れあひごを極すど血をさるた血はあよりこのき血
衣類陪員をいもはれやとよそはのすつらにとすつら
あげるとハ掃部頭屬をさるたまゝをその方ハ医者ハ

功者なれども武通ハ不功者なり武士を野陣をさるたのう
へふも起臥なりく陣場へ糠詰二重縁をちゆくはとをら
ぬちとをらやをあつたのう血はあつたぬやうはまゝ
うて陣場はけつらきハをらぬはのくやうはまゝ
祿を内書家の血先をなとハをらぬ不了答そのくハそ
進ハ軍中れはとけのく靜平れとまそそれや三十万石余の
分限似合ぬいさんたつとやづきなれどもあつたけと
いふそのを治はれと見まはれどありつたの道心むけん
のむれつ時分はひとちやと相詰はくまて乱をま
すそのはやはれ様様して寒濕はあつて害あるがをら
をちやく相をてつとをさるたのよとの役いふとせしるが

よくは臥具の類縮布をよてやそらゝりするを遊女様
君れちとあり武士をその金銀よて馬鞍武道具丈夫よ
しらへるやむあといやとすれは進バ医者至極此尤
の由あるや中なるはて此庭をちらと見れを何のう急木
そともなく真中又野づら石れいりうなるあ一尋じ事
はうり四角は見えおの進なるすの医者やや此前の由
物よふいあをりうするといよは外れ方と様を泉水と石
をよはあふよ本されはあれ四角のまえ石ハかきりける
此そのまきとやくれあれを自分が行水場とやとお不
ちられなる医者やや左やう方らば上よ雨霞をぬるを
はけられてよくはうん雨のふりやときハ此不自由とす

これぞありくその方ハ医者とちがひ世間れはくハ不功者
うな行水ハをうごうふてはるを雨よぬする氣づのひをなき
ちと志やとみえをられけるはて六月土用入暑さともさう
しきよは機燈とてひとりていそをるよいさく一府一寺ま
りりきんとおををらせは座一き一由ををらせなる土用不
一れ節の急由中一きとよは武具馬具ひきちら一て風を
はるをちりその志あ一金銀をちりなるあはとむ七およ
その結構そのうへ幾間もくもかきりたなく出用り一なり
あゝの医者ややうはてくおびと一き此道を外の由大名
様うへつとゆるり見やのがられほど澤山なるをあれな
くづまくも結構なる由道をうなとやくれを掃部頭局

あれそかの遊女遊君の寐道具―やとみへとみせらるる
 々とちなりあれよりわて内中辰どれみくわれいよく
 武道を随分多しあまれくる 葛藤別紙

○日下部兵右衛門角見廻りて伏見より入りて嵯峨山へ出
しれとき周防も様を助くそとよりふとあらうへ麻狩は出
し留まり助太夫我等あみありひひつる日下部殿を助太
夫とあらうへ入りの助くそと右中あけはそのうちへ城廻り
家中侍や一きを兵右衛門角見廻りて中へ入るく才上
よききあるお作とあらうくはとぞと一向證なきことと
は江戸そのほくへあつて使ははるをこれつきよそれと
き路跡よとあらうくつて周防も角へ路跡はいつてきされ

此と祈^そ訟^そ中^{ちゆう}に於て七日^{なな}がら 知行^{ちかう}いづ^いか^かハ何^{なに}の^のやそ
 とて^{ごと}に機^き嫌^{けん}あ^あ^い^いを^をは^は生^{せい}ず^くその時^{とき}は家^けを
 質^{しち}し^しち^ちの^のれ^れす^す 何^{いづ}方^{かた}あ^あて^ても身^みは^は甚^しき^きなる^{なる}ゆ^ゆと^とか^かを^を
 甚^む用^{よう}と^と異^い見^{けん}中^{ちゆう}に^に江^{かう}戸^こ志^し中^{ちゆう}に^に達^{たつ}て^てお^おる^るを^をき^き
 ら^ら是^{こゝ}に^に通^とを^をし^して^て座^ざに^に烟^{えん}草^{そう}を^をる^るづ^づと^とく^くを^をり^りさ^さ五^ご寸^{すん}
 ば^ばの^のり^り此^{こゝ}烟^{えん}管^{かん}を^を木^も綿^{めん}袋^{たい}に^に中^{ちゆう}に^により^{より}お^おり^り紙^しは^はけ^けみ
 る^るる^るる^るあ^あも^もお^おり^りづ^づ火^かを^を所^{こゝ}に^にお^おけ^けい^いそれ^{それ}の
 こ^ころ^ろまで^{まで}火^かを^をお^お上^うに^にお^おき^きを^をく^くい^いす^す 嫌^{けん}燭^{そく}と^と燭^{そく}
 る^るて^てい^いづ^いい^いバ^バか^かや^やう^うに^に嫌^{けん}燭^{そく}を^をて^てる^るる^るあ^あの^のこ^ころ^ろを^をい^い
 ち^ちぎ^ぎ火^かを^をち^ちに^に臺^{だい}所^{じよ}に^に焼^や火^かの^のお^およ^よを^をい^いて^てる^るを^をさ^さり^りい^いと
 て^て嫌^{けん}燭^{そく}を^をお^おり^りを^をさ^さま^まに^に強^{かう}て^てを^をり^りい^いや^やう^うに^にや^やう^うに^にバ^バ瑠^る

命を後よするを公儀れはるるを許ひ自己に先務も
もあつるなり國郡をめぐらざるをそのま行は
るをてきくはるるをきくはるるをてきくはるるを
かそらつてはるるをあらんとなり唐津の畑を
るをてきくはるるをきくはるるをてきくはるるを
ちむすゝゝゝ下僕に喰ひてそのま喰ひて可
まわすも諸士も下知するゝゝゝ右両月を麦飯を食
ゝ衣服ハ木綿をまづゝゝゝ條約をまづゝゝゝむ自分も木
綿衣服をまづゝゝゝ曰下ゝ命をまづゝゝゝみつゝゝゝ先
づゝゝ善とすゝゝを以てゆれを口を折ぎて下
僕よくまづゝゝゝ凡高廣の行跡をまづゝゝゝ

武將感
狀記

○本多能光おれ家よを毎月定日ありて執事をまづ有司監
察此士よで餐食此ありあり君もまづ相とも食
わふまを相伴日と名づくる膳部二汁五菜をこのり
の時君群臣は向て曰くおのゝ平日に飲食はちを
なるべし我も常は美味を食ふを美味を著やを
をけくして忠良撫民は充んと欲する先祖に功勞
よりて諸候に榮貴をもち國民の上は君とありて衣服
もけきよあらざるを曾祖父の攻戰野戦はあ
て堅陣を衝圍をやづあるひそ一日二日は一食一飯
ありて大は艱難を嘗り一方はよそのの夢を

そり義食を飽すてり義服をあつてあはせんあは天
命をたそまはるゝ似たりされそ我祖父此功勞を晝夜
日をも且馳驅して錢金を竭し府庫むなしくなら
ざる意はたそめて兵をあげ征伐は志しつゝあはるべ
うらまをたのれを君への不忠先祖への不孝なり道を忠孝
れりつゝより重きハなりそせし當家ハ幕府普代れ重
臣として上れおぼしきよりあはる用極め城邑をたづ
けりしは藩屏となりてはひは先づけれりあり武備
をそより家業としておほしきべきはありまはれ義は
よりてわきはひは義酒佳肴をそとめ衣ハ裂けりをも
つて常ははるれ食ハ飢をさくるをそつて節と酒

を經格とわはてれり男女れみちを水火を操るゝおほく
は我よりかくれおほく餘約して諸事満足するおとを
尤うれ人道のはひは丈夫れ勇剛をそちゆべまといふ
なりまを況や汝等れおとそハ平生魚肉酒肴も食を
るおとあるよりれを我今日かくれおほくの珍味を設け
るおとれども鳥のあつめれをそちひけるをちのきこふ
より幕府は殺生を禁じられ江府は鳥獸を賣買をばるよ
し尤その法令遠國ハハちよびまはるも民としておほい
はあらばれを今日鳥獸のあつめれをそちへけるをちや
まはる以後ハ鳥肉を食さざるはちのけり今日を格別な
れをそちを酒をもさるべしとして持てそちあり

て諸士といふ事を多しひたり 明君文 武蹟

○伊豫宇和島近年ハ風俗七直己村候公此德風ヲなびぬ
学も亦なりけれを時とえぬ此深意なりていふこと五
ヶ年此あひぶきびく候約とてぬんとて大ニ嚴密ニ
おこなりきなりあるハ寶曆四年の事とてよ君公もは
祢ニ綿服をきされ小倉織此袴夏ハ浴衣の由なり
中やうは此服をきなりひはて此膳ハ一汁一菜にて夜食
を此香れものにてやあがらる夜分此吸そのは此有種
一純子にて此酒をあるべきまゐるそつともいふ事とて
も此なりとてなりて此を三十餘年しかつらとらる此
衣服を矢張本綿をきなりはハ袖た織をもめされしを

此生涯此なりとてなり毎々老年よりせらるる
志づつて此老臣衆強てやあがらる此膳を此なり二菜なり
あがられ此酒此水なるなるハ此保密此多相増々か
くれむとくつて此水きをきめなりゆるえ末々まで
うけさなり此より此上のおりなりと此を此より金く
五ヶ年此あひぶき略精密ニ此いなるなりゆえは此
力も此東宝曆十二年山門此手傳等も此自力をきつて相
濟なる尋常なりあるとてハ有力此なるなり
てこと調ひなるなりあるなりとて覺悟しぬるなり
是此度ハのくありとてなりぬれぬとて庫中むるなり
らぬ武器此修補をきなり且あらるなり製作さるなり

ひたるまで五ヶ年此内皆略金く抄さすりーの八宝曆九

年かれちきの親矩を相うてらる 欽仰 家譚

○加藤左馬介甲八随分念をいせよくかけべくそれゆゑを

甲八首はけき敵とられ大將此すへよく出るもれなれ

をなり具足は名相は仕るべくちきりづうさうもはてら

るもれなれをなりとられよりて左馬介甲八とい

れその結構はちきりあやうとなり 前橋舊 藏聞書

○蜂屋出羽守世間うはけける侍あり槍をさうらへるは金

のを具銀かなぐよまるとちのちろ不詮義なるちとな

て牙はちのちもれを結構うてちるうーあらすそれさ

へあうのけけ此士ハきらふなり況や槍ハ表道なかり常

も戦場あても軍小屋もてち遠きそのなりを金銀は

あーうんそーいやき奴魚それ目とけ槍もよめ

ちみふらをかからむとどろづー槍ハ鋼もて金具

しるるづよとちらまー落合ト安也槍と金銀もーたる

結構なるも越前もて古兵どもきらひるなりあやゆ

その柄もてち白柄もてち金具ハ鋼より武士も強くあゆ

る又ハ七銀あーうん何とやらん公家めきてあーとど

と 武邊雜談

○江州彦根の城主井伊掃部頭局ハ代々右中將に任じ諸將の

棟梁とされハうろむさう病よまのをらまづきよその

家風質朴うてうけでなく平常此行粧もむうより片

さやうふなりけしと存はされ祿より家来をり
はのひは行義もあきあるよりくはたはつ歴これ諸士へ
不礼もいふてく存は自然と仕くをりするべしそれより
諸方れも本となりぬと棄ははのり中るぬは才一大身
衆ちのちる遊興よくははる存は退付一家中一統
は困窮は相なり茶は湯遊興は長トは百身幹をもち損
用事とやふより馬一疋もをりやうふなり我等公
れはすふとをりてく存ははるて不忠は根本
よはあひ急度ゆのく相うみ一統棄は義はひえ
ありき儀仕らむ基將基連歌は同より武とありと
わうちはよくとをりてく存ははるて不忠は根本

氣を忍むは肉は味増塩は世話をいふ軍用を伝ふ
づよ覚悟才一よは近來は祿より軍用法とありきも
れぬは出来中づくははる油断とぞんは大身衆の
ちよ二三人武道ははるけりはる辨口とぞんて諸人
とやうはめ学問はるよりははる聖賢は道と武道を
よいづは衆も若年此人ははるあるよりきおひは
れもひ急度中よりはあひを諸士は面よりきおひは
はよりひはるははるあるづくやみぬはそれありひ
とありはるははるははるははるははるははるははる
心底より軽蔑ははるははるははるははるははるははる
まやうくは文盲のははる直孝ははるははるははるははる

破とちんとれ老婆心期ちりて符合まその善功れを
 かく朽ざらんをとり拾擷してまよふなりぬ

三省録後編附言下終



江都書林

下谷御成道

青雲堂英文藏板

小學本註	二冊	增補文語碎金	二冊	八面鋒	四冊
扶桑蒙求	三冊	宋名家詩選	二冊	晚唐百家絕句	五冊
題画詩類鈔	二冊	香齋集	一冊	和歌題百絶	一冊
三大家絕句	一冊	蜀山先生詩集	一冊	東征稿 西上記	二冊
漫遊文章	五冊	昔々春秋	一冊	酒中趣	二冊
左傳凡例考	一冊	左傳比事	一冊	歲華一枝	一冊
歲華一枝拾遺	一冊	名乘字引	一冊	名乘字彙	一冊
略註五經字引	一冊	篆書字引	一冊	易學小筌	一冊
書家必用	一冊	書家錦囊	一冊	書家便覽	一冊

古韻通叶	一折	醫書之部	
治痘要方補遺	一冊	痘疹戒草	一冊
痘疹要論	一冊	治痘要論	一冊
痘疹養生訣	一冊	痘疹養食訣	一冊
痘疹科辨要	三冊	續痘科辨要	三冊
種痘辨義	一冊	保嬰須知	二冊
方函	二冊	方函	二冊
日養食鑑	一冊	雜書之部	
翁問答	四冊	三省錄	五冊
世事百談	四冊	瓦礫雜考	二冊
東江小倉百首	一冊	隸書醉翁亭記	
子昂真草十字文		子昂龍興寺碑	
蘭竹畫譜	二冊	竹沙小品	一帖
光琳百圖	二冊		

光琳百圖	後編 二冊	畫圖撰要	三冊	一蝶畫譜	三冊
蕙齋略畫	二冊	刀劒圖考	一冊	刀劒圖考	二篇 一冊
裝劒備考	一冊	鞍鐙圖式	一冊	甲冑着用辨	二冊
貞丈家訓	一冊	田畑調法記	二冊	百姓袋	一冊
校正孔方圖鑑	一冊	珍錢奇品圖錄	一冊	古錢鑑	一冊
佛鬼軍	一休 一冊	三畏一心記	一冊	日蓮御一代記	一冊
善惡種時和讚		八部秘講釋	一冊	曆日講釋	一冊
歌書之部					
貫之集類題	二冊	香川景樹集	二冊	海野遊翁詠	二冊
桂の落葉				柳園家集	二冊
千町拔穂	一冊	園圃拔菜	二冊	萬葉用字格	一冊

靈能一貫	二冊	源氏物語系圖一折	手柄岡持狂歌狂文 ふおき 二冊
蜀山百首	一冊	仮名類纂	竹村茂枝集 穗向屋集 三冊
俳諧之部			
續故人五百題	二冊	掌中故人五百題	一冊
新五百題	二冊	嘉永五百題	二冊
近世五百題	二冊	白雄坊五百題	二冊
過日庵撰 近世十家類題	二冊	名所千題集	三冊
十萬發句集	四冊	乙二發句集	二冊
發句古今撰	二冊	過日庵輯 蒼虬翁句集	二冊
俳諧寂癡	二冊	饒舌錄	二冊
		過日庵撰 名家類題	四冊

一葉集	芭蕉翁 一代集 五冊	一葉集	後篇 四冊 翁之文消息	俳諧集草	十六冊
俳諧四季草	四冊	安政五百題	二冊	過日庵撰 類題金玉集	四冊
風俗文選拾遺	二冊				
梅澤先生手本向		庭訓往來	一冊	風月往來	一冊
千字文	一冊	消息詞	一冊	庭梅帖	一冊
御成敗式目	一冊	女今川	一冊	女推俗要文	一冊
新三十六歌仙	一帖	雪後帖	一帖	新撰詩歌合	一冊
續撰朗詠集	二冊	實語教童子教	一冊		
諸流手本向					
同真名序	一帖	尊朝瀟湘景	一冊	大槁庭訓往來	一冊

大槁新年帖	一冊	橘正敬庭訓	一冊	正敬商賣往來	一冊
蓮池堂法帖	一帖	瀧本芳野道記	一冊	瀧本鴻書帖	一冊
雜書并繪入物之部					
十返舎九紫文 諸國書狀指	一冊	教訓圖會 前後	二冊	皇朝三字經	一冊
繪本國恩俚談	一冊	大學笑句	一冊	裁縫早手引	一冊
米錢胸算用	一冊	每朝神拜小言	一折	式亭三馬作 小野馬鹿村	一冊
十返舎九作 附會案文	一冊	山東京傳作 滑稽文選	一冊	安見道中記	一冊
唐土名所の繪	一技	甲越勇士鑑 前後	二冊	諸職雛形	一冊
花鶴百人一首	一冊	女大學玉文庫	一冊	女庭訓往來	一冊



天下
登龍丸

食物一切
き合ふし
壹粒入
一包代百文
七粒入
一巡代六百五十文

此登龍丸天下一方秘法の秘法にて痰咳喘飲一服の妙薬也
十年二十年痰咳少くはよき飲みてもいかに咳夜も痰も
ありぐれも此薬一粒寝る時不用の時に痰を去る如く痰を治
咳と爲る是ふ圓く心孔の痰れを補ひ氣血を巡り脾胃を調(氣力)を
増し痰病延命するもの難いは古今希代不世の妙薬也功た多し
一十年十年の喘咳 一労瘵の咳 一風のせれ
一加らせき 一痰飲吐てを吐 一周候せりつれ
一齒飲みくむの痛 一婦人産後の産後妊娠のせれ
此外痰より起る病一切より
作痰咳の業若より法の玄物も是たほく賣業もあらず有といふべし

如何程の痰咳も一たびある事ハ予が家の名法中へ他おれは能く
 用ひく偽る程を知るべし 尤外に経費業多く皆包紙中分味
 以求す下人外法も元次不たて ちるん

東叡山 御書物所 江戸下谷御成道 青雲堂英文藏製 青雲堂印

京郡之系	出雲吉次所	同 後形	新屋吉次所	下 徳安戸	以原屋吉次所
大坂心齋	河内屋茂吉所	同 吉次所	吉次所	同 吉次所	大坂心齋
尾崎名古所	永永屋吉次所	同 吉次所	吉次所	下 徳安戸	安永利吉次所
市崎	乃具屋吉次所	同 吉次所	十屋吉次所	同 吉次所	飯田屋利吉次所
新町橋筋	玉満屋吉次所	同 吉次所	吉次所	同 吉次所	上原吉次所
吉次所	湯屋吉次所	同 吉次所	吉次所	上原吉次所	上原吉次所
加前金所	八尾屋吉次所	同 吉次所	吉次所	上原吉次所	上原吉次所
吉次所	小田屋吉次所	同 吉次所	吉次所	上原吉次所	上原吉次所
同 吉次所	紅屋吉次所	同 吉次所	吉次所	上原吉次所	上原吉次所
同 吉次所	扇屋吉次所	同 吉次所	吉次所	上原吉次所	上原吉次所

原 三右衛門著 藏板

文久三癸亥年八月

官許 須原屋茂兵衛

山城屋佐兵衛

和泉屋金右衛門

本屋 勝藏

英屋 文藏

發行書林

